現代の中学生の読書興味と発達的検討
―「本の紹介」における選書から―

神﨑　友子
（京都教育大学附属桃山中学校）

The developmental study of reading interest of current junior high school students
－An implication from the samplers in ”The book of my recommendation”－

Yuko　KANZAKI

2009 年 11 月 30 日受理

抄録：本稿は中学生の読書興味と発達について、附属桃山中学校での読書活動の選書をベースに、2007 年度入学生を対象とした同一集団における 3 年間の経年調査から論じたものである。生徒の選書傾向として、「児童書」から「大人向けの本」への移行が 2 年から 3 年にかけて見られることや、学年が上がるにつれ選書にばらつきが見られ、選書が個性化してくる傾向にあることが明らかになった。また、2 年をピークに現代の人気小説家による「思春期・青春小説」の選書が多いことから、「思春期・青春小説」が「児童書」と「大人向けの本」をつなぐ役割であることが見えてきた。これらのことから、平均読書量が中 2・中 3 で減少し、そのまま下降していくという全国的な読書傾向も視野に入れながら、中学校期における読書指導の在り方について、児童書から大人の読み物へいかに生徒の読書興味をつなげていくかを提案する。

キーワード：読書興味・選書傾向・中学生・発達・思春期青春小説

Ⅰ．はじめに

子どもの読書傾向に関する調査「学校読書調査」（全国学校図書館協議会・毎日新聞社主催）の第 2 回（1955）から第 9 回（1961）には、「今まで読んだ本でいちばん好きな本」という感銘本を問う項目[1)]が設定されていた。次の表 1 は、第 9 回（1961）の中学生の男女を合わせた上位 5 位である。

【表 1　第 9 回（1961）全国読書調査「今まで読んだ本でいちばん好きな本」中学生男女 上位 5 位】

	1 年生	2 年生		3 年生		
1	ああ無情	二十四の瞳		ああ無情		
2	小公子	ああ無情		坊っちゃん		
3	野口英世	次郎物語		路傍の石		
4	アルプスの少女	小公子		次郎物語		
5	次郎物語	路傍の石	シャーロックホームズ	二十四の瞳	小公子	シャーロックホームズ

いずれの学年でも「ああ無情」と「次郎物語」が入っており、「路傍の石」、「二十四の瞳」、「坊っちゃん」などの名作といわれる作品が並んでいる。また、「シャーロックホームズ」のような探偵推理ものもよく読まれている。伝記では、他の人物をおさえて「野口英世」が人気である[2)]。ただ、これは約半世紀前の調査であり、子どもをとりまく読書環境が今とでは変化していることから、あげられた書名に違和感を禁じえない。

そこで本稿では、現代の中学生の読書興味について、附属桃山中学校の 1 年から 3 年のまでの「本の紹介」の選書をいくつかの角度から分析し、発達的検討を試みたい。「本の紹介」の選書の定義は、「今までに読んで感動

し、級友に薦めたい本」で、かつての全国読書調査の感銘本の定義と概ね重なるとして、対象生徒の読書興味及び選書傾向を判断できるとした。

調査方法は、2007 年度入学生を対象とした 3 年間の経年調査とする。なお、他の同様の読書調査では、多くが同じ年度に各学年の調査がされているのに対し、この調査は同一集団での読書興味の変化を 3 年間にわたり追求したことを強調しておく。

また、生徒の選書をカテゴリーに分ける中で、児童書と大人向けの本との境界がなくなりつつあり、1990 年代以降に出版された思春期・青春期の本がマージしてきていることが見えてきた。近年、日本では児童文学と成人文学の一線が崩れつつある（関口,2008）という現状について、思春期・青春小説をとりあげ、児童書と大人向けの本との関係や生徒の読書環境についても言及する。

そして、これらの分析・考察をふまえて、中学校期における読書指導の在り方について、児童書から大人の読み物へ生徒の読書興味をいかに推移させていくかについて提案する。

Ⅱ.「児童書」と「大人向けの本」

この章では、まず選書傾向と編集意図との関連から整理してみる。本の編集方針から見ると、2 類に分けることができる。「児童書」と「大人向けの本」である。

1. 編集意図と出版形態

第一に「児童書」について定義する。明らかに子どもを意識して書かれた本は、選書の傾向として「児童書」と名づける。また、夏目漱石『坊っちゃん』のように児童を対象に書かれていないにもかかわらず、その作品が結果として児童に十分理解され、興味をもたれるものもここに含める。出版形態については以下のようなものである。

- 児童が読むことを念頭においたハードカバーのもの。
- 文庫でも児童が読むことを念頭においた挿絵があるもの、また漢字、語彙の配慮、行間が通常のものに比べて広い、もしくは活字のポイントが大きいもの。

生徒の選書では、太宰治『走れメロス』、宮沢賢治『風の又三郎』、ジューヌ・ヴェルヌ『十五少年漂流記』、灰谷健次郎『太陽の子』、湯本香樹実『夏の庭』、あさのあつこ『バッテリー』、日野原重明『十歳のきみへ―九十五歳のわたしから―』などがある。

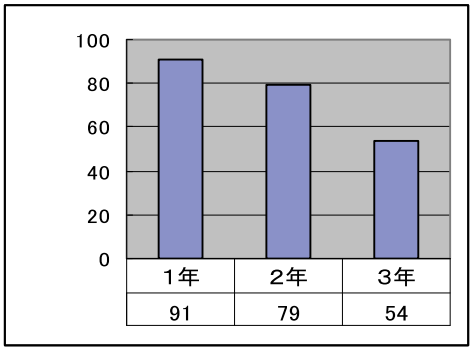
第二に「大人向けの本」について定義する。生徒の選書に、第一にあげた「児童書」を除く小説（推理小説を含む）、随筆、新書など、内容や表現が大人を念頭において書かれているものがあり、これを「大人向けの本」と名づける。出版形態については以下のようなものである。

- ハードカバー、文庫、新書を問わず大人が読むことを念頭においたもの。
- 語彙の配慮がなく、漢字は常用漢字や表外漢字を使用し、ルビがない。行間や活字のポイントは大人が読むことを念頭に置いた通常のもの。

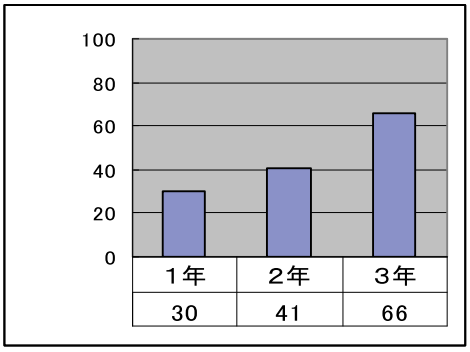
生徒の選書では、太宰治『人間失格』、遠藤周作『海と毒薬』、カフカ『変身』、コナン・ドイル『シャーロックホームズシリーズ』(児童向けのハードカバーや少年文庫でない文庫)、向田邦子『父の詫び状』、竹内薫『99.9%は仮説』などがある。

2. データと考察

以上のような「児童書」と「大人向けの本」というカテゴリーから、生徒の選書傾向を学年ごとに分析したところ、次のように整理できた。これより、学年が上がるにつれ、明らかに選書の傾向が違ってくることがわかる。（1 年ｎ＝121・2 年ｎ＝120・3 年ｎ＝120）[3)]



【図１　児童書を選んだ人数】



【図２　大人向けの本を選んだ人数】

図１、図２から次のようなことが見てとれる。児童書については、1 年 91 人、2 年 79 人、3 年 54 人と学年が上がるにつれ減少している。一方、大人向けの本については、1 年 30 人、2 年 41 人、3 年 66 人と学年が上がるにつれ増加している。表２は児童書と大人向けの本の増減についての χ^2検定の結果である。

【表２　児童書と大人向けの本の変化について】

1 年から 3 年へ（3 年間）	$\chi^2(2)=24.44$　$p<.01$
1 年から 2 年へ	$\chi^2(1)=2.55$　NS
2 年から 3 年へ	$\chi^2(1)=10.54$　$p<.01$

表２より、1 年から 3 年までの 3 年間の変化で見ると、分布に有意差があった（$\chi^2(2)=24.44$　$p<.01$）。さらに学年別に見ると、1 年から 2 年の間にはやや大人向けの本への傾向が見られるが、有意差は見られなかった（$\chi^2(1)=2.55$　NS）。それに対して、2 年から 3 年の間については明らかに有意差があった（$\chi^2(1)=10.54$ $p<.01$）。

全体の傾向として、学年が上がるにつれ、児童書と大人向けの本のそれぞれの比率（%）が 1 年（75:25）、2 年（66:34）、3 年（45:55）と変化し、読書興味が児童書から大人向けの本へ推移していることがわかる。特に、一年ごとの変化で見ると、1 年から 2 年よりも 2 年から 3 年への方が大きく変化していることが明らかである。

これより、「中学校期は児童書から大人向けの本への移行期であり、特に 2 年から 3 年にかけて推移が顕著である」ということができる。

Ⅲ．タイトルからの分析

この章では、具体的にどのような選書があったかについて見てみる。まず、各学年の「児童書」と「大人向けの本」の上位 5 位をあげ、それぞれの選書傾向を考察した上で、全体の選書傾向について整理する。次に、選書を小説系と非小説系に分類し、学年ごとの選書傾向について分析する。

1．各学年の選書傾向

各学年の「児童書」と「大人向けの本」について、上位 5 位でそれぞれの項目の 3 割程度になっていることから一定の選書傾向がうかがえるとして、上位 5 位をあげることにする。なお、これらの選書には、定番的な本とその年や時期に話題になった本が混在していることを先に述べておく。

（1）1 年生（2007 年度）の選書について

【表３　1 年生（2007 年度）の選書 上位 5 位】

	児童書（n＝91）	人数		大人向けの本（n＝30）	人数
1	夏の庭（湯本香樹実）	6	1	博士の愛した数式（小川洋子）	5
2	ＧＯＯＤ ＬＵＣＫ（アレックス・ロビラ／フェルナンド・トリアス・デ・ペス）	5	2	かもめのジョナサン（リチャード・バック）	2
3	西の魔女が死んだ（梨木果歩）	4	2	シャーロックホームズシリーズ（文庫版）（コナン・ドイル）	2
4	バッテリー（あさのあつこ）	3			
4	ＤＩＶＥ！！（森絵都）	3			
4	杜子春（芥川龍之介）	3			

表３の１年の児童書では、『夏の庭』が 6 人と最も多く、『西の魔女が死んだ』、『バッテリー』、『ＤＩＶＥ！！』といった現代の人気小説家による作品が並んでいる。また、メタファー的ファンタジーである『ＧＯＯＤ ＬＵＣＫ』も 5 人と支持を集めている。雑誌『赤い鳥』掲載以来、子どもに愛されてきた『杜子春』は『ＧＯＯＤ ＬＵＣＫ』と空想的で人生の教訓を示唆するという点で共通している。児童書は総数の多さもあるが、同じ本に選書が集中する傾向にある。

大人向けの本では、『博士の愛した数式』が 5 人と最も多い。次いで『かもめのジョナサン』も児童書の『杜子春』、『ＧＯＯＤ ＬＵＣＫ』と似た寓話で、写真ページもあることから中学生にとって読みやすいと思われる。また、長年の子どものベストセラーである「シャーロックホームズシリーズ」も文庫で読まれている。大人向けの本は全体の総数は少ないが、1 位を除くと選書にばらつきがある。

（2）2 年生（2008 年度）の選書について

【表４　2 年生（2008 年度）の選書 上位 5 位】

	児童書（n＝79）	人数		大人向けの本（n＝41）	人数
1	ブランコのむこうで（星新一）	4	1	アルジャーノンに花束を（ダニエル・キイス）	2
2	十五少年漂流記（ジューヌ・ヴェルヌ）	3	1	変身（フランツ・カフカ）	2
2	ナイフ（重松清）	3	1	グラスホッパー（伊坂幸太郎）	2
2	パズル（山田悠介）	3	1	99.9%は仮説（竹内薫）	2
5	エイジ（重松清）・きよしこ（重松清）・夏の庭（湯本香樹実）・楽隊のうさぎ（中沢けい）・いちご同盟（三田誠広）・佐賀のがばいばあちゃん（島田洋七）・二十四の瞳（壺井栄）	2	1	江戸川乱歩傑作選 二銭銅貨（文庫版）（江戸川乱歩）	2

表４の 2 年の児童書では、『ブランコのむこうで』が 4 人と最も多く、名作の『十五少年漂流記』や最近の人気小説である『ナイフ』、『パズル』が続く。『ぶらんこのむこうで』はファンタジーで、1 年でも述べた空想物語への読書興味が引き続きうかがえる。『パズル』については、若手作家によるエンターテイメント小説で、2008 年「学校読書調査」の「1 カ月に読んだ本」の中学 2・3 年男子の 2 位に同作家の別作品が入るなど、男子を中心に人気を集めている。また、5 位についてはそれぞれ 2 人の選書であり、その作品の多さも含めて、1 位から 4 位と合わせて見ると選書が重なる傾向にある。

大人向けの本では、総数が多くないこともあるが、トップが 5 作品でそれぞれ 2 人の選書ということから、1

年より選書の重なりが見えてきたが、それでもばらつきがある。ここでは、『99.9%は仮説』という新書が登場するが、教養書への読書興味が出てきたかというと、これを含めて新書は3人なのでそのようにはいいがたい。

（3）3年生（2009年度）の選書について

【表５　3年生（2009年度）の選書 上位5位】

	児童書（n＝54）	人数		大人向けの本（n＝66）	人数
1	きみの友だち（重松清）	2	1	こころ（夏目漱石）	3
1	無人島で生きる十六人（須川邦彦）	2	1	人間失格（太宰治）	3
1	蜘蛛の糸（芥川龍之介）	2	1	夢をかなえるゾウ（水野敬也）	3
			4	蟹工船（小林多喜二）・塩狩峠（三浦綾子）・ジーギル博士とハイド氏(スティーブンソン)・車輪の下（ヘルマン・ヘッセ）・シャーロックホームズシリーズ（文庫版）（コナン・ドイル）・手紙（東野圭吾）・重力ピエロ（伊坂幸太郎）	2

表5の3年の児童書では、総数が1・2年より減っていることもあるが、1位が3作品でそれぞれ2人の選書と、実に54人中48人が個別の作品であることから、ここにきて選書のばらつきが目立つようになった。

大人向けの本では、1・2 年より選書の重なりは見てとれるが、顕著な人気本はない。また、ここでは『こころ』、『人間失格』といった名作が比較的健闘している。11 歳から 13 歳が少年文学期、15 歳からを内面の心理的葛藤を十分に描写して余すところがない純文学に親しむ時期ということで、純文学期とする（阪本，1971）という見解やⅡ章のデータからも、この時期が中学校における読書興味の転換期であることがわかる。

ただ、この文学的志向には発達の観点からだけでは言い切れないところもある。それは、最近このような名作の表紙について、各社によるコンセプトの違いはあるが、現代の人気漫画家などによる斬新なイラストが増えてきていることである。それぞれの生徒が「ジャケ買い」をしたかはわからないが、出版社が販売のターゲットを子どもに広げているのは確かであり、その戦略に乗せられている可能性があることも述べておく。

2. 全体の選書傾向

以上、各学年の選書傾向について見てきたが、ここで全体の選書傾向について整理してみる。

（1）「児童書」と「大人向けの本」の選書傾向の変化

まず、児童書は、学年が上がるにつれ、選書のばらつきが大きくなり、大人向けの本では、学年が上がるにつれ、選書のばらつきが小さくなるということである。

なぜこのような傾向が見られるのか。仮説として、児童書であれば、1・2 年では主人公の年齢と自分の年齢が近いものが比較的多く、3年になると、そういった作品が少なくなる。大人向けの本については、1年の『博士が愛した数式』を除いて、学年が上がるにつれ、主人公の年齢と自分の年齢が近づくことで、選書の幅が広がるということが考えられる。

次に、学年が上がるにつれ、児童書、大人向けの本を含めて人気の集中する本が少なくなり、選書が個性化する傾向にあるということである。

このことについては、Ⅴ章で生徒の選書方法の調査から詳しく述べることにする。

（2）児童書の選書と生徒の年齢との関係

前項では、主人公の年齢と生徒の年齢との関係について仮説を述べたが、ここでは、この仮説について児童書に焦点化して、各学年の上位5位の作品から考察する。

1年の選書のそれぞれの主人公の年齢について、『夏の庭』は小6、『西の魔女が死んだ』、『バッテリー』はどちらも中学に入学したばかり、『ＤＩＶＥ！！』は中2である。これらの現代の人気小説家による思春期・青春小説についていえば、小6から中2と、1年未満の幅はあるが、いずれも生徒の年齢に近い。

2年の選書のそれぞれの主人公の年齢について、5つの短編からなる『ナイフ』は中2が主人公のものを含め

て小学生と中学生である。同じく重松作品の『エイジ』は中 2、『きよしこ』は少年の小 1 から高 3 までである。また、『楽隊のうさぎ』は少年の中学校期、『いちご同盟』は中 3、『佐賀のがばいばあちゃん』は少年の小 1 から中 2 まで、『十五少年漂流記』は 8 歳から 14 歳の子どもたちである。多少前後しているが、多くは生徒の年齢と重なっている。なお、2 年でも『十五少年漂流記』を除けば、いずれも現代作家による思春期・青春小説である。

3 年の選書の主人公の年齢について、『きみのともだち』は少女の中学校期を中心とする小学校高学年から高校生までで、この作品もまた重松による現代の思春期・青春小説である。

こうして見ると、1・2 年では多くの作品で主人公の年齢と生徒の年齢に相関が見られるのに対し、3 年では上位 5 位の選書からは 1 作品しか年齢の相関が見られない。このことは前項での仮説を裏付ける一つの根拠になるだろう。しかし、3 年の児童書は総数が少なく、選書にばらつきがあることから明言は避けたい。

また、この考察から『夏の庭』、『西の魔女が死んだ』、『バッテリー』、『ＤＩＶＥ！！』、『ナイフ』などの重松作品、『楽隊のうさぎ』、『パズル』といった現代の人気作家による思春期・青春小説には、中学生を中心とした人物設定が多いということがわかった。これより、児童書における「思春期・青春小説」と生徒の読書興味との関係性が見えてきた。

3. 小説系と非小説系の分類

以上、各学年と全体の選書傾向について述べてきた。ここでは生徒の選書を小説系と非小説系、小説系はいわゆる古典的名作とそうでないものに分けて、各学年の選書傾向を見ることにする。

（1）カテゴリーの定義

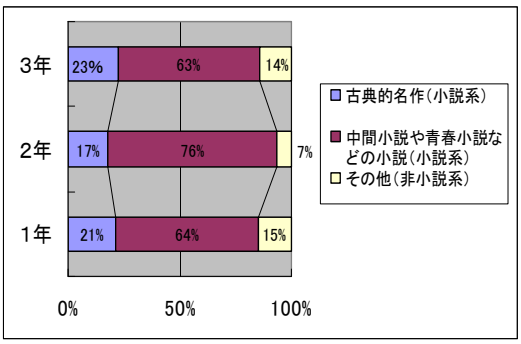
カテゴリーは「古典的名作」、「中間小説や青春小説などの小説」、「その他」の 3 類とする。

「古典的名作」の定義は、文学的価値が高く、多くの人々に評価され、読みつがれている小説・物語とする。生徒の選書には『坊っちゃん』、『高瀬舟』、『羅生門』、『十五少年漂流記』、『ハムレット』などがある。

「中間小説や青春小説などの小説」の定義は、「古典的名作」に含まれない小説・物語全般とする。生徒の選書には『ぶらんこのむこうで』、『太陽の子』のような国内の小説・物語、『少年は戦場へ行った』、『アルジャーノンに花束を』のような外国の小説・物語、『バッテリー』、『風が強く吹いている』のような現代の作家による思春期・青春小説、『重力ピエロ』、『手紙』のような推理・ミステリー小説、『恋空』のようなケータイ小説などがある。

「その他」の定義は、非小説系とする。生徒の選書には『父の詫び状』、『たいのおかしら』のような随筆、『99.9%は仮説』のような新書、『夢をかなえるゾウ』、『オシムの言葉』のような自己啓発書などがある。

（2）各学年の選書傾向



【図３　小説系・非小説系の分類】

図３を見ると、いずれの学年でも「中間小説や青春小説などの小説」が全体の 6 割から 7 割を占めている。

カテゴリー別では、「古典的名作」は 1 年 21%、2 年 17%、3 年 23%と、2 年で少し減少し、3 年で再び 1 年と同程度に戻っている。「中間小説や青春小説などの小説」は 1 年 64%、2 年 76%、3 年 63%と、2 年で増加する傾向が見られ、3 年で再び 1 年と同程度に戻っている。「その他」は 1 年 15%、2 年 7%、3 年 14%と、2 年で減少する傾向が見られ、3 年で再び 1 年と同程度に戻っている[4)]。

これより、「中間小説や青春小説などの小説」が 2 年で増加し、「その他」と「古典的名作」が 2 年でやや減少する傾向が見られた。

(3) 2 年での「中間小説や青春小説などの小説」の増加について

前項の小説系と非小説系の分類では、いずれの学年でも「中間小説や青春小説などの小説」が多数を占めた。ここでは、このカテゴリーの選書が 2 年で増加することについて、生徒の読書興味や発達と合わせて考察する。

2 年の選書で最も多い作家は、『ナイフ』、『エイジ』などの重松清である。いじめや自分の思いがうまく伝えられないなど、思春期の子どもの悩みや心の揺れをテーマとしている。重松の作品については 1 年 1 人、2 年 11 人、3 年 6 人と、2 年が最も多く、2 年の児童書全体での占める割合も高い。

また、『パズル』、『リアル鬼ごっこ』などの山田悠介の作品についても、1 年 3 人、2 年 6 人、3 年 2 人と、2 年がやや多い。バイオレンスや無軌道な殺人の繰り返しが主軸をなし、生徒が思春期の不安定さを吹き飛ばそうとするような強い衝動を求めていることがうかがえる。

これより、この時期は自己を安定させるための読書や思春期の不安定さを反映した読書をする時期であるといってもよい。生徒は思春期・青春小説をはじめとする小説・物語を読み、登場人物の悲しみや怒り、苦悩に共感することで自己のカタルシスを行っているのだろう。また、名作の教示的でどこか型にはまったようなものや、非小説系の現実味を帯びた作品よりも、彼らには自分の心をどっぷり置けるような虚構の世界が必要なのだろう。

このように選書傾向を生徒の読書興味や発達と関連させることで、2 年で名作や非小説系が減少し、「中間小説や青春小説などの小説」が増加する理由が解けてきた。

Ⅳ. 児童書の中の思春期・青春小説

前章では生徒の選書傾向についてタイトルから分析した。その中で、現代の思春期・青春小説において、主人公の年齢と選書を行う生徒の年齢との相関が見えてきた。また、小説系と非小説系の分類では、「中間小説や青春小説などの小説」が各学年で多数を占め、一部の検証ではあるが、思春期・青春小説への生徒の読書興味がうかがえた。これらをふまえて、この章では現代の人気小説家による思春期・青春小説に焦点化して、近年の児童書の年齢層の広がりと合わせてその役割について考察する。

1. 児童書の対象年齢

児童書の対象年齢について、かつては小学生の十歳前後を中心としていたのに対し、現在では、以前と比べ読者年齢が上昇している（藤本,2009）というように、対象年齢が広がり、扱う領域が変化してきているという。Ⅱ章 2 節で述べたように、3 年で大人向けの本がはじめて児童書を上回ったが、それでも 1・2 年の児童書の際立った多さと、3 年でも 5 割近い選書があることから、中学生での児童書の人気が見てとれる。

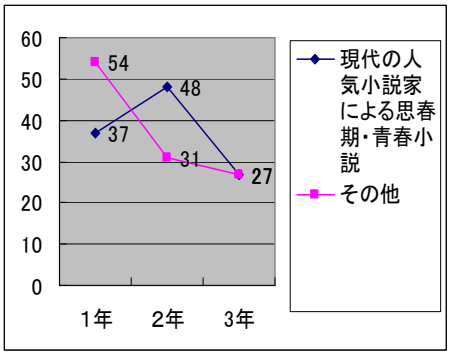
では、なぜ、以前は十歳前後が中心であった児童書が、今では中学生の多くに支持されているのか。児童書の読者年齢の上昇の理由について、森絵都、角田光代、佐藤多佳子などの思春期文学、青春文学と呼んだほうがふさわしいものが、児童文学出身の作家によって多く書かれ、児童文学の領域を拡大してきた（藤本,2009）とある。

この見解に基づいて、次節では「現代の人気小説家による思春期・青春小説」を軸に、これらが生徒の選書の児童書の中に占める割合について分析する。

2. 児童書の中の「現代の人気小説家による思春期・青春小説」

ここでは、児童書について、「現代の人気小説家による思春期・青春小説」とそうでないものに分けて、各学年の生徒の選書傾向を見ることにする。思春期・青春小説における現代の人気小説家については、文献[5)] を参考

に、梨木果歩・あさのあつこ・森絵都・角田光代・梨屋アリエ・重松清・笹生陽子・石田衣良・佐藤多佳子・三浦しをん・湯本香樹実・山田悠介などとし、個々の作品の内容についても考慮した。なお、分類は「現代の人気小説家による思春期・青春小説」と「その他」の 2 類とした。



【図４　児童書の分類】

図４について、「現代の人気小説家による思春期・青春小説」は 1 年 37 人、2 年 48 人、3 年 27 人と、児童書全体の中に占める割合は 4 割から 6 割と約半数を占める。もし、この分野がなければ、Ⅱ章の「児童書」と「大人向けの本」の分類の様相はおそらく違ってきただろう。このようにして見ると、「現代の人気小説家による思春期・青春小説」がいかに中学生に浸透し、従来の児童書の対象年齢を広げているかがわかる。

また、図４の 2 つの折れ線を見ると、1 年では「その他」が「現代の人気小説家による思春期･青春小説」を上回っているのに対し、2 年では、「現代の人気小説家による思春期・青春小説」が「その他」を上回っており、分布に有意差が見られる[6)]。

これより、「現代の人気小説家による思春期・青春小説」は 2 年で増加する傾向にあるといえる。また、3 年で「現代の人気小説家による思春期・青春小説」が減っているのは、児童書の選書の全体的な減少と大人向けの本への移行が要因として考えられる。

これらのことを整理すると、1 年では、「現代の人気小説家による思春期・青春小説」を除く児童書が多く、2 年では、児童書の中で「現代の人気小説家による思春期・青春小説」が逆転し、3 年では、「児童書」から「大人向けの本」へ推移するという、中学生の読書興味に関する発達の過程が見えてきた。すなわち、「現代の人気小説家による思春期・青春小説」は児童書と大人向けの本との間に位置する、いわばクッション的役割であるということができる。

3. 思春期・青春小説の意義

前節では、現代の人気小説家による思春期・青春小説が、児童書と大人向けの本をつなぐ役割を果していることが明らかになった。ただ、このような思春期・青春小説によって、児童文学と成人文学との境界が崩れつつある（関口,2008）という現状は否定できない。しかし、ここでは中学生の読書において、この分野があることの意義について論じたい。

思春期・青春小説は児童書と大人向けの本のそれぞれの接続に対応していることから、生徒は児童書から大人向けの本へいきなり飛躍することなく、思春期・青春小説を緩衝地帯としてじっくり移行することができる。このことを外食に例えていうならば、子どもがお子様ランチからいきなり和風定食へ食の志向を変えることは難しいが、その間にハンバーグ定食のようなものがあれば、この間の移行に無理はなくなる。

そして、このような人気作家の作品は、大人が読んでも十分に楽しめるという、対象を児童に限定しないポピュラリティに支えられている。このことが児童書と大人向けの本の境界をなくしているとされるが、別の見方をすれば、このような作品の登場人物は中学生や高校生でも、その内容には従来の児童書にはない大人の読み物との接点が多く、大人の読み物への自然な導入となるのではないだろうか。

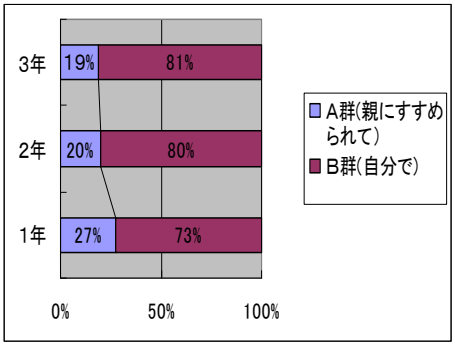
また、読書というと、どうしても名作を良しとする「名作主義」がある。しかし、現代のさまざまな問題が描かれている思春期・青春小説の仮想現実の中で、子どもが主人公の目線で思いをめぐらすという読書行為は、子

どもの生きる力を育てるという意味でも大変意義深い。名作の選書は附属桃山中学校の調査でも根強いが、このような思春期・青春小説を読むことは既存の価値意識に頼らない、名作からの脱却にもつながるであろう。

Ⅴ．生徒の選書方法

前章では、児童書の中の思春期・青春小説が果す役割と意義について述べてきた。ここでは、Ⅲ章２節１項で述べた“学年が上がるにつれ、人気が集中する本が少なくなり、選書が個性化する傾向にある”ということについて、その理由を生徒の選書方法から考えたい。データは2009年11月に附属桃山中学校の国語科で全員対象に行った「2009年度 読書調査」[7]の中の「本の紹介の選書方法」によるものとする。（1年ｎ＝116・2年ｎ＝119・3年ｎ＝117）

選書方法については、次の２群に分けて整理した。「親にすすめられて」をＡ群、「図書館や本屋で見て」、「出版社のおすすめの本のブックレットなどを見て」、「家にあるものから」などをＢ群とした。Ａ群は親が選書にかかわっているとするもの、Ｂ群は基本的に自分で選んだものとした。



【図５　生徒の選書方法】

図５を見ると、Ａ群（親にすすめられて）は、１年27%、２年、20%、３年 19%と、学年が上がるにつれ減少している。一方、Ｂ群（自分で）は、１年73%、２年80%、３年81%と、学年が上がるにつれ増加している。２年から３年にかけてほとんど変化はないが、１年と比べるとやや変化が見られる。ただし、有意差は見られなかった[8]。

これより、生徒の選書方法として、学年が上がるにつれ親のすすめる本ではなく、自分で本を選ぶ傾向にあるということができる。

ここで、この選書方法の傾向と“学年が上がることにともなう選書の個性化”について考えてみると、選書の発達の過程として、１年では親がすすめる本や話題の本などを選び、２年、３年と学年が上がるにつれ、自分の価値観に合う自分の読みたい本を選ぶようになるとすれば、中学校後半における読書の個性化の理由について理解することができる。

Ⅵ．おわりに

以上、中学生の読書興味と発達について、附属桃山中学校における読書活動の選書をベースに、同一集団による経年調査をもとに検討してきた。ここでは、この調査で見えてきたことと課題および提案について整理する。

1．見えてきたこと

生徒の読書興味と発達について、以下の３つのことが見えてきた。

一つ目は、児童書と大人向けの本の２分類による各学年の分析から、中学校期は児童書から大人向けの本への移行期であり、特に２年から３年にかけて顕著な推移が見られるということである。

二つ目は、全学年の児童書と大人向けの本の上位５位の選書を俯瞰すると、児童書は学年が上がるにつれ、選書のばらつきが大きくなり、大人向けの本では、学年が上がるにつれ、選書のばらつきが小さくなるということがわかった。また、学年が上がるにつれ、人気の集中する本が少なくなり、読書が個性化する傾向が見えてきた。これについては、親がすすめる本や話題の本から、学年が上がるにつれ、自分の価値観に合った本を自分で選ぶようになるという、選書方法の発達の考察から裏づけができた。

三つ目は、小説系と非小説系の分類では、「中間小説や青春小説などの小説」がどの学年でも多く、特に「現代の人気小説家による思春期・青春小説」が現代の中学生の読書興味を論じる上でのカギであることがわかっ

た。思春期・青春小説は児童書から大人向けの本への接続に対応し、また、大人の読み物への導入的役割を果していることが明らかになった。

2. 課題と提案

2008 年「学校読書調査」の中学生・高校生の 1 ヶ月の読書量は、中 1 が 4.3 冊、中 2・3 が 3.7 冊、高 1・2 が 1.6 冊、高 3 が 1.4 冊と、中 1 をピークに減少する傾向にある。クラブ活動や勉強など生徒の生活が忙しくなるのが大きな要因であると思われるが、ここではその他の要因についての管見を述べたい。

本研究では中 2 から中 3 にかけて、読書興味が児童書から大人向けの本へ推移することがわかったが、中学校期の生徒の読書量が減少する 2・3 年というのは、この児童書から大人向けの本への移行期と重なる。これより、この時期の読書量の減少には児童書から大人向けの本への移行が関係しているとすると、この時期の子どもは「自分に合う本が見つからない」ことが原因で読書から離れていくという見方ができるだろう。そこで、この移行期に、生徒の発達や志向に合う作品の提示や適切な指導を行うことで、生徒は自分に合う本を見つけることができ、全体として中学生の読書量減少の緩和につながることも期待できる。

では次に、そのような効果的な読書指導として、本研究で明らかになった児童書と大人向けの本をつなぐ思春期・青春小説の活用や、大人向けの本の世界へ誘うための学習活動について提案する。

例えば、アメリカで開発された少人数グループで同じ本について話し合う「リテラチャー・サークル」のような活動を授業に取り入れたらどうだろう。生徒は教師から紹介された 4～5 種類の本の中から自分の読みたい本を選び、同じ本を選んだ子ども同士が集まって話し合いをする。特に本の選定の段階で、教師が生徒の発達や目的に合う本を意図的に提示していくことによって、生徒は自分の求めている本と出会える可能性が高くなる。また、ひとり読みを生かした話し合いを重視するこの活動では、多様な読みと深まりが生まれ、生徒の本への興味も増すにちがいない。

また、思春期・青春小説については、子どもに限らず大人も含むポピュラリティに支えられているのが日本の現状である。今後の展望として、アメリカやイギリスのように児童書と大人向けの本の間に設けられ、認知されている「Young Adults」のように 1 つのジャンルとして確立され、位置づけられていくことが望ましい。そうなることで、作者から中学生・高校生へのメッセージ性が強まり、彼らの読書興味が増してことが期待される。

読書離れが進む中、生徒が豊かな読書経験を通して、大きく成長していけるよう中学校期における読書指導の在り方について今後も研鑽を深めていきたい。

注

1）現在の「学校読書調査」には「今まで読んだ本でいちばん好きな本」の項目はなく、「調査前の 1 ヶ月間に読んだ本」という項目が第 2 回（1955）以降、現在まで続いている。

2）伝記について、阪本一郎（1971）は『現代の読書心理学』で、子どもの読書興味の発達段階として、12 歳から 14 歳を思春期の悩みを克服するために偉人英雄の人間的苦闘を扱った「伝記」に興味を持つことから、「伝記期」と定義している。これと最も近い 1963 年の学校読書調査の感銘本（中学生）では、1 年生を中心に野口英世のほか、織田信長、福沢諭吉、ベートーベン、エジソン、キュリー夫人などが上位に入っている。

3）附属桃山中学校には一般学級とは別に帰国学級がある。帰国学級では 1・2 年は「本の紹介」をせず、3 年の混合編成になって始めることから、データの変動要因になるとして、この対象に帰国学級の生徒は含めていない。

4）このデータについては、χ^2検定を行った結果の残差分析による。

5）関口（2008）、藤本（2009）らの文献による。

6）このデータについては、χ^2検定を行った結果の残差分析による。

7）附属桃山中学校の独自の読書調査である。調査日からさかのぼって 1 ヶ月（10 月）に読んだ本の名前、読んだ本の冊数、また、「本の紹介」の本の名前、作者、選書方法について、質問用紙に回答を記入するよう求めた。ただし、ここでのデータ抽出には、注 3 と同じく帰国学級の生徒のものは含めていない。

８）このデータについては、χ^2検定を行った結果の残差分析による。

文献

足立幸子（2002）「読書指導方法論の探究―Literature Circles の試み―」『第 103 回全国大学国語教育学会発表要旨集』. 全国大学国語教育学会.pp.102-105

国分一太郎（1957）『生活記録・児童文学』.未来社

阪本一郎（1971）『現代の読書心理学』.金子書房.pp.129-134

関口安義（2008）『児童文学へのアプローチ』.翰林書房.p17

中川正文（1977）「児童文学とはなにか」『児童文学を学ぶ人のために』.世界思想社.pp.2-6

藤本英二（2009）『児童文学の越境へ　梨木果歩の世界』.久山社.pp.13-21

毎日新聞社編（1980）『学校読書調査 25 年―あすの読書教育を考える―』.毎日新聞社.pp.224-231

毎日新聞社編（2009）『2009 年度版 読書世論調査 第 62 回読書世論調査 第 54 回学校読書調査』.毎日新聞社